

シャヴオットのお誘い

アシェル・イントレータ

2014年05月30日



わたしは、神さまの約束の偉大さについて、使徒 2:17 で聖霊が注がれたことを読むたびに、感動させられます。「神は言われる。終わりの日に、わたしの霊をすべての人に注ぐ...」

シモン・ペテロが引用した預言者ヨエルによるこの聖句から、神さまが終わりの時を通して起る世界規模のリバイバルを、前もって計画されていることが、間違いでないことが分かると思います。このリバイバルは、使徒 2 章の方法で、しかもより広範囲に起こるのです。第 2 のペンテコステは再臨の予兆なのです。

弟子たちの一致と長時間の祈りのコンビネーションが、最初のリバイバルに繋がりました(使徒 1:14 – この人たちは...、みな心を合わせ、祈りに専念していた)。私たちがシャヴオットに、一晩中みなが心を合わせて祈ることで、世界規模の油注ぎと使徒的な使命が成就するための神の力が、解放されるかもしれません(使徒 1:8)。

何年間も私たちは、これらの預言的聖句に思いを馳せ、その実現を夢見ています。その成就のため、私たちはヤッド・ハシュモナにてイスラエル・メシアニック連盟の協力のもと、徹夜の断食祈禱会を計画し実施してきました。一晩中祈るのが難しければ、数時間でもいいのです。このユダヤの山地に来ることが不可能なら、あなた自身の教会や祈り会、家など、今いるその場所で祈ってください。

私たちが心の一致を持って忍耐の祈りをするのが、欠かせない重要な部分です。紀元 1 世紀の彼らはエルサレムで祈り、エルサレムで聖霊が注がれたのです。終わりの世紀にある私たちが全ての国々で祈るなら、主の御霊が、全ての国々に注がれるでしょう。この素晴らしい約束の成就に立ち会うことができる私たちは、何という特権に預かっているのでしょうか。

ゴルダ・メリア首相との出会い

シラ・ソルコラム



1967年10月15日、私は両親と2週間の訪問予定で、イスラエルに到着しました。1967年に、30分もの新国家、イスラエルの設立と、エルサレムが最近ユダヤ人の手に戻ったことについて、ドキュメンタリー映画を制作しようと決めました。

「Dry Bones」と名付けたこの映画の制作に3年間掛かりました。イスラエル国立劇場の劇団員で、著名な考古学者のイガエル・ヤディン（マサダ砦やメギドの丘を発掘し、後の副首相にもなった人物）の弟である、ヨッシー・ヤディンを紹介されました。ヨッシーはこのフィルムのナレーションをすることに同意してくれました。

ヨッシーはまた、当時のイスラエル首相ゴルダメシアに、「Dry Bones」について話し、総理はその作品を見たいと、彼に伝えました。総理がどれ程忙しいかが分かっていたので、総理宅にそのフィルムを持って伺いましょうかと提案しました。そして、1971年8月10日に上映するため招待されました。大きな期待を胸に、このことにより、今までにない程祈られました。

祈っていると、夜ゴルダ・メシアがベッドに横たわり、天を仰いで、「神は本当にいるのだろうか？」と問いかけている姿が目に見えて来ました。この招待に対してある種の霊的な障害が起りそうなことを感じ、神さまにこの映画が邪魔されることなく上映できるように祈りました。

上映当日、大きなブーケを持って総理宅を訪問しました。警護官たちが花束の茎に爆弾が仕掛けられていないか慎重に検査していたことを憶えています。複数の支援者と家族の人たちがいました。

短い談話の後、上映を始めました。映画のテーマは、後の世に実現することが、預言者たちによって預言されていた通り、60年代後半のイスラエルを灰の中から建て上げられた国として描写しています。ナレーターが、主の民の罪のために死んでいくメシアの苦しみについて記されたイザヤ53章を、朗読する箇所があります。映像には、白黒で露出過度の画像の中、メシアと見られる人の影が主の羊たちの中に落ちていき、神秘的な印象を醸し出しています。このシーンは、また祭壇の上で殺される羊の画像と重なります。エンディングは、その預言者が悔い改めを奨励し、エゼキエル書にある、国々の狼たちから、主の羊を買い戻すための神さまの約束でした。

映画が終わったとき、しばらく沈黙に包まれていました。そしてゴルダが「この映画のどの部分が旧約でどの部分が新約だったのでしょうか？」と訊ね、私は「ナレーションの全てが旧約聖書のみからの引用です」と答えました。総理は座ったまま考えてから、「では、なぜ『血』なのですか？ どういった意味があるのですか？」と質問を投げかけてきました。当然、イス

ラエルの民の罪を購うために、動物の血を流すことが命令されているレビ族の祭司職についての話題が開かれました。私は、血が流された後、初めてコハニム（祭司たち）が民の執り成しのため、神の臨在の中へ入ることが許されていたことを強調しました。

さらに私は説明しました、「それがゆえに、イエスは死んで、私たちが生きることができるように、その命を捧げられたのです。彼こそが、ユダヤ人の、ひいてはそれを望むすべての人の、罪に対する永遠の許しの方法なのです。彼こそがイスラエルの神の臨在への扉なのです。」と。

ゴルダはもう一度イザヤ 53 章の場面について話題を戻し、静かに言ったのです「イエスだったんだわ。」その言葉を聞いて、私は彼女の心がどれほど開かれているかに、驚きました。